埼玉大学紀要　教育学部，68(2)：419－441（2019）

幼児期におけるwhite lieの発達過程

―向社会的行動としての嘘―

安　藤　咲　乃　　和光市立本町小学校
清　水　由　紀　　埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード：嘘行動、道徳性、向社会的行動、心の理論、対人葛藤

1．背景と目的

1-1　向社会的な嘘

私たちは、日常生活の中で、どれくらい嘘をついているのだろうか。村井（2000）によると、日本の大学生は1日平均1.77回嘘をついている。嘘をつくという行為は、私たちの日常の中でとても身近なものなのである。嘘という言葉を聞くと、多くの人は否定的な印象を受けるであろう。親や教師などの大人は「嘘をついてはいけない」「正直に本当のことを言いなさい」と子どもに言い聞かせる。しかし「嘘も方便」という諺があるように、人は他者と良好な人間関係を築くために嘘をつく時がある。例えば、友人からプレゼントをもらい、それがほしくないものであっても、がっかりした顔を見せず笑顔で「ありがとう。気に入った。」と答えるであろう。こうすることで、相手の気持ちを害さず、対人的な葛藤を回避し、良好な人間関係を維持することができるためである。このように、嘘は対人場面におけるコミュニケーションの潤滑剤として機能しているといえる。

村井（2013）によると、ヴレイ（Vrij, 2008）は嘘をつくときの利益の受け手を「嘘の話し手（利己性）」と「嘘の聞き手などの他者（利他性）」に、利益の対象を「心理的な理由」と「物理的な理由」に分類しており、前述した例は利他性に基づく心理的な不利益を回避するための嘘であるといえる。このような向社会的な嘘はwhite lieと呼ばれる。上宮・仲（2009）はwhite lieを「相手を傷つけないための、必ずしも悪いとはいえない嘘」と定義し、「たわいのない嘘」と訳している。私たちはこのような嘘を誰から教わるともなく身につけ、日常生活の中で自然と使用しているわけだが、いつごろからその機能について理解し、実際に使い始めるのだろうか。またその発達には、道徳性の発達をはじめとした他の認知機能の発達や教育的介入がどのように影響しているのだろうか。本研究では、幼児を対象としてwhite lieに対する善悪判断やwhite lieの使用の有無、white lieを使用する動機づけ、および教育的介入の効果について明らかにすることで、white lieの発達メカニズムについて明らかにすることを目的とする。

1-2　幼児期における道徳性の発達

幼児期は道徳性や規範意識が芽生える時期である。例えば、友だちや養育者との関係の中で、してよいことと悪いことの区別をし、決まりを守る必要性を理解できるようになっていく。嘘に関する善悪判断に関しても、幼児期において「嘘は悪いことである」と理解できるようになる（上宮・仲, 2009）。さらに、幼児期は友だちや周りの人の気持ちを理解し、思いやりをもった行動ができるようになる時期でもある。発達早期における向社会性については、前言語期でさえ他者を助け

る行為をする人物をより好み、他者を妨害する人物を避ける傾向があることが明らかになっている(Hamlin, Wynn, & Bloom, 2007)。つまり、発達初期から人は向社会性の判断基準を働かせることができるのである。また、Aknin, Hamlin, & Dunn（2012）によって、自らが所有するお菓子を他者にあげるというコストを払うときでさえ、幼児は他者に何かを与えることに喜びを感じるということが示されている。これらのことから、「相手を傷つけてはいけない」といった道徳的判断の基準は幼児期において十分に備わっていると考えられる。

上記のようなさまざまな道徳性の発達を考慮すると、正直に真実を伝えれば相手を傷つけてしまう状況に置かれた幼児の葛藤は非常に大きいと考えられる。幼児がそのような対人葛藤場面においてどのように折り合いをつけ、どう自らの気持ちや行動を調整するのか、つまり、どのようにして葛藤を乗り越えようとするのかを明らかにすることは、子どもの道徳性や向社会性の発達、それを支援するための教育の在り方を考える上で意義のあることだと考える。

1-3　嘘行動の発達に関する先行研究

これまで子どもの嘘に関する研究は多く行われてきたが、その中心は自分の失敗や約束違反などの行為を隠すための嘘や、相手を騙すための嘘であった。幼児の真実と嘘の概念理解や嘘行動を研究した上宮・仲（2009）では、年中児（4-5歳）と年長児（5-6歳）のほとんどが嘘と真実の同定や善悪判断を正しく行うことができ、年長児では嘘か否かの判断には信念が関わっていることを理解し始めることが示された。さらに、年中児と年長児の約９割が実際に嘘行動を示したことが明らかになっている。

また、嘘行動には誤信念理解などの認知的能力との関連がこれまで多く示されてきた。しかし、瓜生（2007）は主人公を救うために主人公の敵に嘘をつけるか、幼児を対象に実験を行った結果、年中児で79%、年長児で100%が嘘行動を示し、誤信念課題の結果と比較したところ、誤信念課題の正答より１年以上先んじた成績であることから、年中児以上になると、「心の埋論」獲得に先立って嘘をつくことが可能になることが示された。さらに、年齢が上がるにつれて、嘘行動の前提要因としての認知的基盤が誤信念理解から反事実的推論能力へと推移していき、誤信念理解能力に反事実的推論能力が加わることで、より高いレベルの嘘行動が可能になることも示唆されている（藤戸・矢藤, 2015)。

1-4　white lieの発達に関する先行研究

子どもの非言語的な表示規則の獲得や相手を騙すことを目的とする嘘行動の発達についてはこれまで多くの研究が行われてきたが、近年white lieのような向社会的な嘘についても研究が進んでおり、その多くが「期待外れのプレゼント」課題を用いた調査を実施している。例えば、３～11歳児を対象としたTalwar, Murphy, & Lee（2007）では、子どもが期待外れのプレゼントをもらったときに、贈り主に対してどのような反応を示すかを調査した。結果は、参加児全体の68%がwhite lieをつき､加齢に伴ってwhite lieをつく子どもが多くなるというものであった。また､7、９、11歳児を対象に「期待外れのプレゼント」課題を用いた調査を実施したXu, Bao, Fu, Talwar, & Lee（2010）では、嘘をつくことや真実を伝えることに対する道徳的な理解と実際の嘘行動との関連を検討した。子どもの道徳的な理解を調べる課題では、「期待外れのプレゼント」をもらう状況において、white lieをつくよりも真実を伝えることに対してポジティブな評価をすることが示された。また、７歳は９、10歳よりも真実を伝えることに対してポジティブな評価をした。

つまり、年齢が上がるにつれてwhite lieに対してよりポジティブな評価をするようになることがわかった。一方、実際に参加児が「期待外れのプレゼント」をもらったときにどのような反応を示すのかを調べた課題では、７歳児で40%、９歳児で50%、11歳児で60%の子どもがwhite lieをついた。さらに、white lieをついた動機について分析した結果、７歳児は「真実を言ったら先生に怒られるから」などネガティブな結果を避けるためといった自己防衛的な動機を答える子どもが多いのに対して、11歳児は相手の気持ちを損ねないためといった他者志向的な動機を答える子どもが多かった。このことから、加齢に伴ってwhite lieをつく割合が高くなるだけでなく、その動機づけも発達的に変化することが示唆された。また、二つの課題の関連性を分析した結果、実際の行動において真実を伝える、あるいは嘘をつくがその動機づけが自己志向的であった場合は嘘に対する道徳的な判断においてよりネガティブな評価をした。つまり、子どもの嘘についての道徳的な理解は彼らの実際の行動やその動機づけと関連することが示された。

しかし、上記の二つの研究からわかるように、white lieをつく割合にはばらつきがある。Xu, et al.（2010）の調査においてwhite lieをつく割合が低かった要因の一つに、嘘をつく相手の違いが考えられる。Xu, et al.（2010）で使用した課題では、実験者ではなく参加児の先生がプレゼントの贈り主であったため、嘘をつくことに対する後ろめたさがより強く働いたと考えられる。上宮・仲（2009）で嘘をつくとどうなるかという質問に対して、「先生とかに怒られる」というような“権威者による評価”への言及が多かったことからも、先生や親に対して嘘をつくことはより躊躇されると考えられる。このように実験場面の設定によってwhite lieの使用率に差は生じるが、幼児期はwhite lie獲得の萌芽時期であると推測できる。また、Talwar, et al.（2007）では、子ども一人の条件と親が同席し、期待外れだったことは言わないように教示した条件とを比較しており、後者の条件の方がより多くの子どもがwhite lieをついたことを報告している。つまり、親による教示が子どものwhite lieをつく行動を促すことが示唆された。さらに、他者の感情を説明するといった親から子どもへの働きかけが、初期の向社会性の個人差を説明することも示されている（Brownell, Svetlova, Anderson, Nichols, & Drummond, 2013）。これらのような先行研究から、相手の気持ちに注目させ、”相手を傷つけないための嘘”であるというwhite lieの意義の理解を促すことで、子どものwhite lie行動が促進されると予測できる。

1-5　本研究の目的と仮説

子どものwhite lieに関する研究は盛んに行われているが、日本で幼児を対象に行われたものは少ない。人間関係が重視され、相手を敬うことが強く求められる集団主義文化の日本では、より早期からwhite lieの発達がみられると考えられる。また、先行研究では「期待外れのプレゼント」課題が多く用いられているが、対人場面において言語的な表出を調整する場面は多岐に渡る。例えば、料理を振舞われたときに、あまりおいしくなくてもおいしいと伝えるような「お世辞」もその一つである。そこで、本研究においては日本の子どものwhite lieの発達過程を検討するとともに、「期待外れのプレゼント」だけでなく、他者に関する評価を下す場面を用いることで、多様な場面におけるwhite lieの表出について明らかにすることを第一の目的とする。

さらに、先行研究で多く研究されている自分を守るための嘘や他者を騙すことを目的とする嘘の発達において、誤信念理解や実行機能などの認知的能力との関連が検討されているが、それらの認知的能力と向社会的な嘘行動との関連について研究しているものは少ない。そのため、本研究では誤信念課題を並行して行うことで、white lie の使用と誤信念理解との関連について検討する

ことを第二の目的とする。

また、Xu, et al.（2010）ではwhite lieの動機づけについて検討されているが、対象が児童期の子どもであるため、就学前の子どもがどのような動機づけによりwhite lieをつくのかは明らかになっていない。そこで、本研究においては幼児を対象とすることで、動機づけの発達的変化について明らかにすることを第三の目的とする。

加えて、嘘行動の有無だけでなく、white lieの理解や道徳的判断について検討するとともに、white lieの意義の理解を促進することがwhite lie行動につながるのかを検討することで、white lieが生起するプロセスを明らかにすることを第四の目的とする。

なお、本研究では、white lieの理解を促進することでwhite lieの使用に変化があるかを検討するために、仮想場面を用いた課題を実施する。Gnepp & Hess（1986）では仮想場面を用いた課題を行っているが、ここでは主人公がどう応答するかを質問し、言語的な表示規則の理解について検討しているものの、参加児自身がどのような応答をするかを明らかにしたわけではない。そこで、本研究では仮想場面を用いて参加児自身が対人葛藤場面においてどう応答するかを問う課題を設定する。

以上を踏まえ、本研究では以下の仮説を検討する。

仮説Ⅰ：幼児期はwhite lieをポジティブに評価するようになり、white lie行動が可能となる。
仮説Ⅱ：white lie行動は誤信念理解に先行して生起する。
仮説Ⅲ：幼児期におけるwhite lieの動機づけは自己防衛的なものである。
仮説Ⅳ：white lieの意義の理解を促すことで、white lie行動が促進される。

2．方法

2-1　参加児

東京都内の幼稚園に通う年中児22名（男児10名、女児12名、平均年齢＝５；１、範囲＝４；７～５；６）、年長児24名（男児13名、女児11名、平均年齢＝５；11、範囲＝５；６～６；６）、合計46名を対象とした。協力園にはあらかじめ研究の目的や方法、データの取り扱い等について説明をし、協力への同意を得た。

2-2　材料

誤信念課題：ウサギのパペット、ヒヨコのパペット、赤い箱、青い箱、ボールを用いた。
white lie課題：期待外れの物をもらう場面を３コマに分けて描いた紙芝居を用いた。内容は１）ほしくないプレゼントをもらう、２）おいしくないクッキーをもらう、３）上手ではない絵をもらう、の３つの物語である。３つの物語のうち、１つ目と３つ目は物を受け取る主人公を参加児自身と仮定する自己仮想課題、２つ目は物を受け取る主人公を他者と仮定する他者仮想課題に使用した。登場人物が女の子の場合と男の子の場合を作成したため、計６つの紙芝居を作成した。

2-3　手続き

調査は個室で一人ずつ実施され、一人当たりの所要時間は約10分であった。課題は①誤信念課題、②white lie課題の順番で行った。white lie課題は、主人公を参加児自身とする自己仮想課題と主人公を他者と仮定する他者仮想課題を行った。手続きのフローチャートをFigure 1に示す。

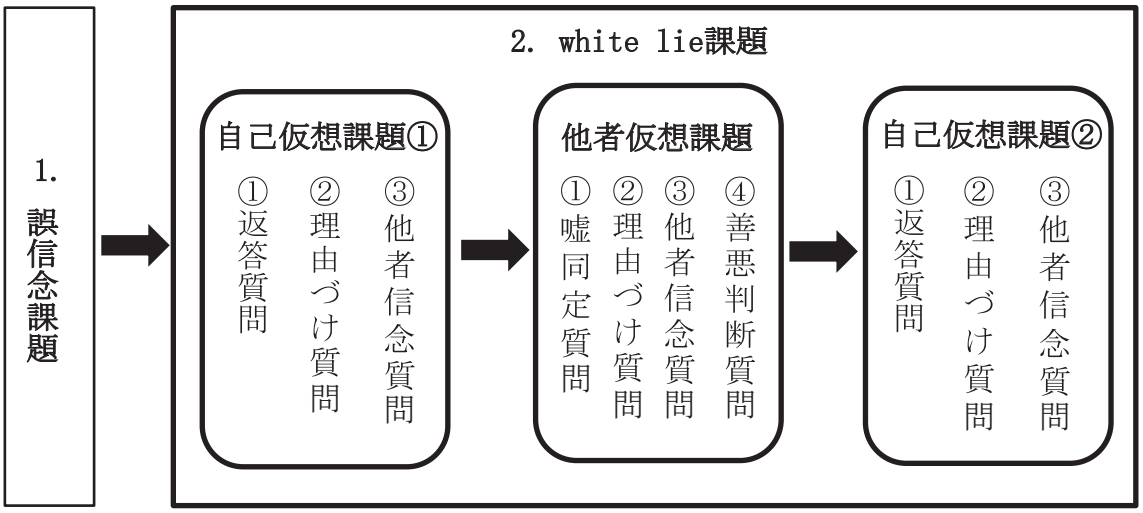

Figure 1　手続きのフローチャート

2-4　課題

（1）誤信念課題

誤信念課題では、参加児が「心の理論」を獲得しているかどうかを検討した。ここでは、ウサギとヒヨコのパペットを用いた。課題の前には、「これからぬいぐるみを使ってお話をするね。お話の最後に○○くん（ちゃん）に質問をするからよく見ていてね。」と教示した。課題の内容は（1）ウサギさんが遊んでいたサッカーボールを青い箱に入れて立ち去る。(2) そこにヒヨコさんがやってきて青い箱からサッカーボールを取り出して遊び、赤い箱に入れて立ち去る。(3) ウサギさんが戻ってきて、もう一度サッカーボールで遊ぼうとする。ここで、誤信念質問「ウサギさんはどっちの箱を開けるかな？」に続いて、正答者には現実質問「ボールは今どっちの箱に入っているかな？」、さらに参加児全員に記憶質問「ウサギさんがボールを入れたのはどっちの箱だったかな？」を行った。

（2）white lie課題

お話の前には、「次に紙芝居を３つ見せるね。お話の最後に○○くんに質問をするからよく聞いていてね。」と教示した。

自己仮想課題①：課題の内容は、(1) お友だちが○○くんのために一生懸命プレゼントを作ってくれました。お友だちは○○くんが絶対に喜んでくれるだろうと思っています。(2) ○○くんがプレゼントをもらって見てみると、それは全然気に入りませんでした。(3) そこで、お友だちが○○くんに「どう？　気に入った？」と聞きました。以上３つの場面からなる物語を３枚の絵からなる紙芝居を見せながら読み聞かせた。

返答質問：３コマ目で相手から聞かれたことに対する返答を尋ねる返答質問「○○くんは何て答える？」を行った。回答が「気に入った」あるいは「気にいらなかった」以外であった場合、または回答できなかった場合には、「『気に入った』と答える？　それとも『気に入らなかった』と答える？」と二者択一式で問うた。どちらの選択肢を先に提示するかはカウンターバランスをとった。

理由づけ質問：次に、虚偽の返答だった場合はなぜそのような返答をするのか確かめる理由づけ質問「どうして本当は気に入らなかったのに気に入ったって答えたの？」を行った。

他者信念質問:最後に、自分の返答による相手の信念が理解されているかを問う信念質問「気に入っ

た（気に入らなかった）と答えたらお友だちはどんな気持ちになるかな？」を行った。回答が「うれしい気持ち」と「悲しい気持ち」、もしくは類似内容（例「いい気持ち」「嫌な気持ち」）以外の回答であった場合は、「うれしい気持ちかな？　悲しい気持ちかな？」と二者択一式で問うた。どちらの選択肢を先に提示するかはカウンターバランスをとった。

（3）他者仮想課題

課題の内容は、(1) りょうくん（りんちゃん）がさとしくん（さとみちゃん）のために一生懸命クッキーを作りました。りょうくんはさとしくんが絶対に喜んでくれるだろうと思っています。(2) さとしくんがクッキーをもらって食べてみると、それは全然おいしくありませんでした。(3)そこで、りょうくんがさとしくんに「どう？　おいしい？」と聞きました。するとさとしくんは「うん、おいしいよ。」と答えました。以上３つの場面からなる物語を３枚の絵からなる紙芝居を見せながら読み聞かせた。

嘘同定質問：主人公の発言が本当の気持ちでないことを同定できているか確かめる同定質問「さとしくんが『おいしいよ』と答えたのは、本当の気持ちかな？　本当の気持ちじゃないかな？」を行った。ここで誤答だった場合には、「実は、本当はおいしくなかったけど、『おいしいよ』って本当の気持ちじゃないことを言ったのね」と正答を説明した。

理由づけ質問：次に、主人公が相手を思って虚偽の返答をしたことを理解できているか確かめる理由づけ質問「どうしてさとしくんは、本当はおいしくないのに『おいしいよ』と答えたのかな？」を行った。理由づけ質問の後には全員の子どもに、「『おいしくないよ』と本当のことを言ったらりょうくんが悲しんでしまうと思ってさとしくんは『おいしいよ』と答えた」ことを説明した。

他者信念質問：次に、主人公の返答による相手の信念が理解できているか確かめる信念質問「さとしくんが『おいしいよ』と答えて、りょうくんはどんな気持ちになったかな？」を行った。回答が「うれしい気持ち」と「悲しい気持ち」に類似、もしくは類似内容（例「いい気持ち」「嫌な気持ち」）以外の回答であった場合、または回答できなかった場合は、「うれしい気持ちかな？　悲しい気持ちかな？」と二者択一式で問うた。どちらの選択肢を先に提示するかはカウンターバランスをとった。

善悪判断質問：最後に、主人公の返答がいいことか悪いことか判断させる善悪判断課題「さとしくんが本当はおいしくなかったけど『おいしいよ』と答えたのはいいことかな？　悪いことかな？」を行い、なぜそう思うのか理由づけも問うた。どちらの選択肢を先に提示するかはカウンターバランスをとった。

（4）自己仮想課題②

別の物語を用いてもう一度自己仮想課題を行った。３つの課題の物語は１）ほしくないプレゼントをもらう、２）おいしくないクッキーをもらう、３）上手ではない絵をもらう、の３つであり、どの物語をどの課題で使用するかは参加者間でカウンターバランスをとった。登場人物の性別はすべて参加児と同性とした。

３．結果

3-1　誤信念課題

誤信念質問、現実質問、記憶質問のすべてに正答できた場合に誤信念理解があるとし、誤信念課題の正答とした。参加児全体で正答と誤答に偏りがあるか調べるために二項検定を行った結果、正答者の割合（67.4%）の方が誤答者の割合（32.6%）よりも有意に高かった（$p<.05$）。年齢群

間（$\chi^2(1)=1.32$, *n.s.*）や性別群間（$\chi^2(1)=0.01$, *n.s.*）における有意な偏りは見られなかったが、年長児（75.0%）の方が年中児（59.1%）より正答者の割合は高かった。

3-2　white lie課題

（1）自己仮想課題①

white lieの使用：自己仮想課題の返答質問において、虚偽の返答をした場合（例：気に入った）を正答とし、真実を口にした場合（例：気に入らなかった）を誤答とした。返答質問おける性別別の正答者の割合をFigure 2に示す。参加児全体で正答と誤答に偏りがあるか調べるために二項検定を行った結果、正答者の割合（65.2%）の方が誤答者の割合（34.8%）よりも有意に高い傾向が見られた（$p<.10$）。年齢群間（$\chi^2(1)=0.16$, *n.s.*）や性別群間（$\chi^2(1)=0.70$, *n.s.*）における有意な偏りは見られなかったが、女児（70.8%）の方が男児（59.1%）よりも正答者の割合は高い傾向があった。

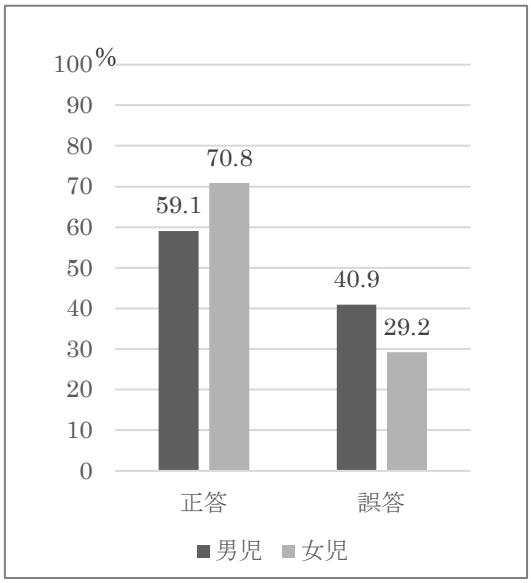

Figure 2　自己仮想課題①の返答質問における性別別の正答者の割合

white lie使用の理由づけ：参加児がどのような動機によりwhite lieを使用したのかを明らかにするために、理由づけ質問における回答をTable 1を基にカテゴリー化した。

Table1　white lie使用の理由づけのカテゴリー化基準

	カテゴリー	定義	例
1	相手の気持ち	相手の気持ちに言及している	お友だちが悲しんじゃうから。
2	相手の好意	相手の好意に言及している	せっかく作ってくれたから。
3	相手との関係性	相手との関係性に言及している	友だちだから。
4	その他	上記のカテゴリーに当てはまらない回答	
5	わからない	回答できない、もしくは「わからない」という回答	

分類については実験者２名が独立に行った。自己仮想課題①、他者仮想課題、自己仮想課題②の理由づけ質問におけるすべての回答数112個のうち、２人の実験者の分類が一致したものが109個、一致しなかったものが３個であり、実験者の一致率は97.3%であった。分類が一致しなかったものに関しては実験者間で話し合い分類した。自己仮想課題①の理由づけ質問における各カテ

ゴリーの人数（割合）をTable 2に示す。

χ^2検定を行った結果、カテゴリーの分布に有意な偏りが見られた（$\chi^2(4)=23.00$, $p<.001$）。残差分析の結果、“相手の気持ち”に言及する参加児の割合（53.3%）が有意に高かった（$p<.01$）。また、性別とカテゴリーの関連を調べるために性別（2）×カテゴリー（5）のχ^2検定を行った結果、有意な偏りは見られなかったが、残差分析を行った結果、女児において“相手の気持ち”（70.6%）が有意に多く（$p<.05$）、“わからない”（5.9%）が有意に少なかった（$p<.05$）。男児においては“わからない”（38.5%）が有意に多く（$p<.05$）、“相手の気持ち”（30.8%）が有意に少なかった（$p<.05$）。理由づけ質問における性別別の各カテゴリーの割合をFigure 3に示す。

Table 2　自己仮想課題①の理由づけ質問における各カテゴリーの人数（割合）

	1相手の気持ち	2相手の好意	3相手との関係性	4その他	5わからない
男児	4（30.8%）〈−2.2*〉	1（7.7%）〈−0.4〉	1（7.7%）〈1.2〉	2（15.4%）〈0.3〉	5（38.5%）〈2.2*〉
女児	12（70.6%）〈2.2*〉	2（11.8%）〈0.4〉	0（0%）〈−1.2〉	2（11.8%）〈−0.3〉	1（5.9%）〈−2.2*〉
全体	16（53.3%）	3（10.0%）	1（3.3%）	4（13.3%）	6（20.0%）

（注）〈　〉は残差を示している。*：$p<.05$、**：$p<.01$

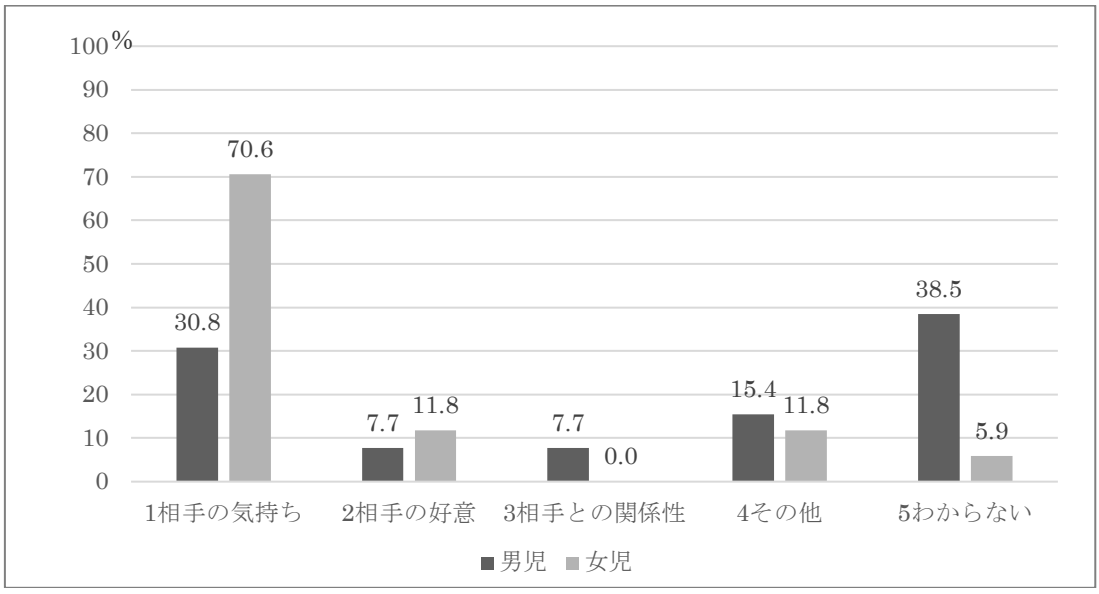

Figure 3　自己仮想課題①の理由づけ質問における性別別の各カテゴリーの割合

他者感情理解：自分の返答による相手の気持ちが理解されているかを問う信念質問において、参加児がwhite lieを使用した場合は「うれしい気持ち」など相手がポジティブな感情になることを回答した場合を正答とし、参加児が真実を口にした場合は「悲しい気持ち」など相手がネガティブな感情になることを回答した場合を正答とした。

自己仮想課題①では参加児全員が信念質問に正答し、自分の返答によって相手がどのような気持ちになるのかを理解していた。

white lie得点：Table 3のように、自己仮想課題①における返答質問と理由づけ質問の回答を合わせて得点化した。虚偽の返答をせず「気に入らなかった」などと真実を口にした場合を0点、「気

に入ったよ」などと虚偽の返答をしたがその理由づけはできなかった場合を１点、虚偽の返答をし、「お友だちが悲しんじゃうから」などと正当な理由づけができた場合を２点とした。理由づけは、先に示したカテゴリーの１（相手の気持ち）、２（相手の好意）、３（相手との関係性）に当てはまるものを正答とした。性別別の各得点の割合をFigure 4に示す。

white lie得点の男児の平均値（SD）は0.86（0.83）、女児の平均値（SD）は1.29（0.91）であった。年齢群や性別群とwhite lie得点に関連があるかを検討するために、２要因（年齢・性別）の分散分析を行った結果、主効果や交互作用は見られなかった。

Table 3　自己仮想課題①における各得点の人数（割合）

	虚偽	理由づけ	全体
0点	×	×	16（34.8%）
1点	○	×	10（21.7%）
2点	○	○	20（43.5%）

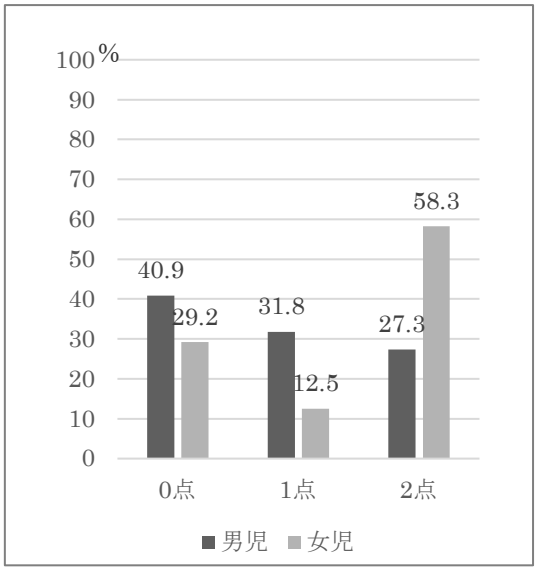

Figure 4　自己仮想課題①における性別別の各得点の割合

（2）他者仮想課題

<u>嘘の同定</u>：他者仮想課題の同定質問において、主人公の発言を「本当の気持ちでない」と回答した場合を正答、「本当の気持ちである」と回答した場合を誤答とした。嘘同定質問における学年別の正答者の割合をFigure 5に示す。

参加児全体で正答と誤答に偏りがあるか調べるために二項検定を行った結果、正答者の割合（73.9%）の方が誤答者（26.1%）の割合より有意に高かった（p<.01）。年齢群間で正答者の偏りがあるかを調べた結果、正答者の割合は年長児（87.5%）の方が年中児（59.1%）よりも有意に高かった（$\chi^2(1)=4.80$, p<.05）。性別群間における有意な偏りは見られなかった（$\chi^2(1)=0.72$, *n.s.*）。

<u>white lieの理由づけ</u>：参加児がwhite lieの意義を理解できるかどうかを検討するために、主人公の返答内容の理由づけを自己仮想課題①と同様にTable 1を基にカテゴリー分けした。他者仮想課題の理由づけ質問における各カテゴリーの人数（割合）をTable 4に示す。

χ^2検定を行った結果、カテゴリーの分布に有意な偏りが見られた（$\chi^2(4)=42.91$, p<.001）。残差分析の結果、“相手の気持ち”に言及する参加児の割合（54.3%）が有意に高かった（p<.01）。

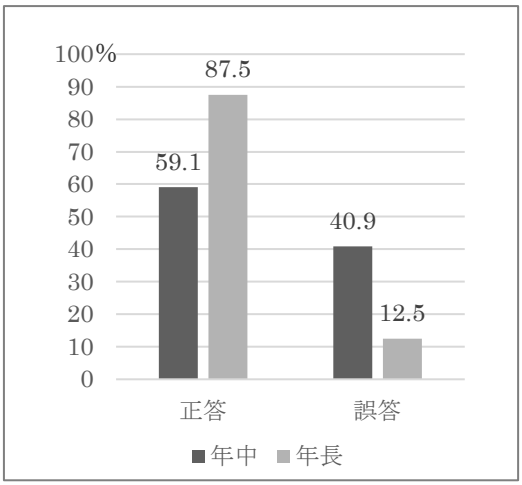

Figure 5　嘘同定質問における学年別の正答者の割合

性別群間における有意な偏りは見られなかった（$\chi^2(4)=0.35$, *n.s.*）。また、“相手の気持ち”について言及した参加児25名のうち、「お友だちが悲しむから」などと、真実を伝えた場合相手がネガティブな感情を持つことを説明した者が18名（72%）、「お友だちが喜ぶから」などと、虚偽の返答をした場合相手がポジティブな感情を持つことを説明した者が７名（28%）であった。理由づけ質問における性別別の各カテゴリーの割合をFigure 6に示す。

Table 4　他者仮想課題の理由づけ質問における各カテゴリーの人数（割合）

	1相手の気持ち	2相手の好意	3相手との関係性	4その他	5わからない
男児	11（50.0%）〈−0.6〉	1（4.5%）〈0.1〉	1（4.5%）〈0.1〉	2（9.1%）〈0.1〉	7（31.8%）〈0.5〉
女児	14（58.3%）〈0.6〉	1（4.2%）〈−0.1〉	1（4.2%）〈−0.1〉	2（8.3%）〈−0.1〉	6（25.0%）〈−0.5〉
全体	25（54.3%）	2（4.3%）	2（4.3%）	4（8.7%）	13（28.3%）

（注）〈　〉は残差を示している。

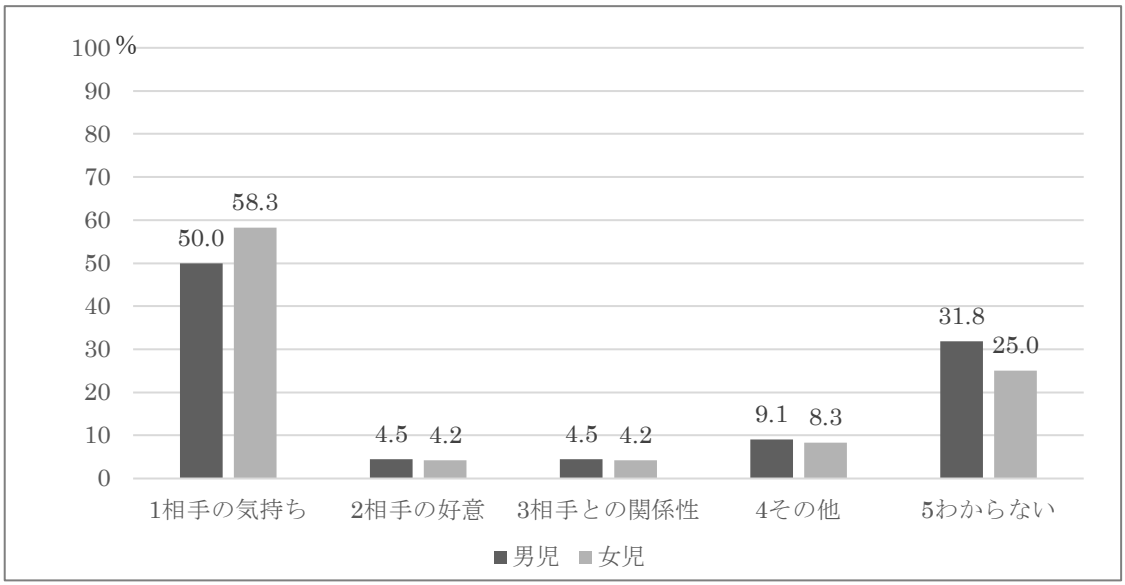

Figure 6　他者仮想課題の理由づけ質問における性別別の各カテゴリーの割合

他者感情理解：主人公の返答による相手の気持ちが理解されているかを問う信念質問において、「うれしい気持ち」など相手がポジティブな感情になることを回答した場合を正答とした。

他者仮想課題では１人を除く参加児全員が正答した。

white lieの善悪判断：善悪判断質問における性別別の各回答の割合をFigure 7に示す。二項検定を行った結果、主人公の虚偽の返答を“いいこと”と判断する割合（71.7%）の方が“悪いこと”と判断する割合（28.3%）よりも有意に高かった（p<.01）。年齢群間（$\chi^2(1)=0.02$, *n.s.*）や性別群間（$\chi^2(1)=2.11$, *n.s.*）における有意な偏りは見られなかった。しかし、男児（81.8%）の方が女児（62.5%）よりもwhite lieを“いいこと”と判断する割合がやや高かった。

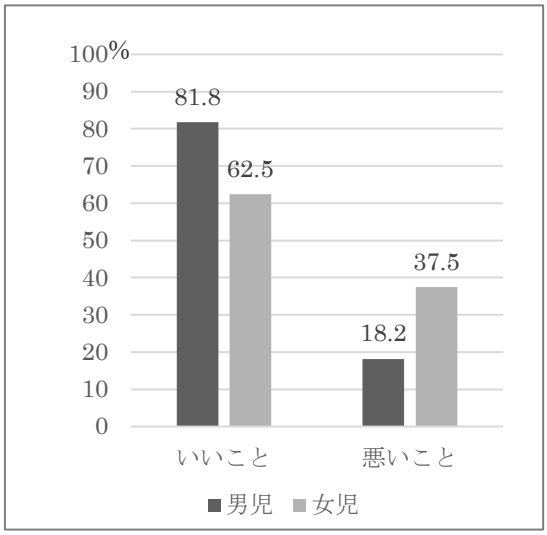

Figure 7　善悪判断質問における性別別の各回答の割合

善悪判断の理由づけ：参加児がどのような理由によりwhite lieの善悪判断を行ったのかを明らかにするために、他者仮想課題における善悪判断の理由づけをTable 5を基にカテゴリー化した。

Table 5　善悪判断の理由づけのカテゴリー化基準

	カテゴリー	定義	例
1	相手の気持ち	相手の気持ちに言及している	お友だちが喜ぶから。
2	相手の性格	相手の性格に言及している	優しいから。
3	相手との関係性	相手との関係性に言及している	お友だちと仲良くなりたいから。
4	嘘への言及	嘘をついていることに対して言及している	嘘つくのはだめだから。
5	その他	上記のカテゴリーに当てはまらない回答	
6	わからない	回答できなかった、もしくは「わからない」と回答	

分類については実験者２名が独立に行った。すべての回答数46個のうち、２人の実験者の分類が一致したのが46個であり、実験者の一致率は100%であった。各カテゴリーの人数（割合）をTable 6に示す。

参加児の回答をカテゴリー分けした結果、分布に有意な偏りが見られた（$\chi^2(5)=30.44$, p<.001）。残差分析の結果、“わからない”（p<.01）、“相手の気持ち”（p<.01）、“嘘への言及”（p<.01）が有意に多かった。年齢群間（$\chi^2(5)=3.78$, *n.s.*）や性別群間（$\chi^2(5)=6.06$, *n.s.*）における有意

な偏りは見られなかったが、女児は男児よりも“嘘”であることを理由としてwhite lieを“悪いこと”と判断する傾向にあるという特徴が見られた。また、善悪判断で“悪いこと”と判断した参加児は1人を除いて全員が理由づけで“嘘”であることについて言及した。善悪判断の理由づけにおける性別別の各カテゴリーの割合をFigure 8に示す。

Table 6　善悪判断の理由づけにおける各カテゴリーの人数（割合）

	1相手の気持ち	2相手の性格	3相手との関係性	4嘘	5その他	6わからない
男児	5（22.7%）〈−0.5〉	0（0%）〈−1.4〉	1（4.5%）〈0.1〉	4（18.2%）〈−1.2〉	1（4.5%）〈1.1〉	11（50.0%）〈1.8〉
女児	7（29.2%）〈0.5〉	2（8.3%）〈1.4〉	1（4,2%）〈−0.1〉	8（33.3%）〈1.2〉	0（0%）〈−1.1〉	6（25.0%）〈−1.8〉
全体	12（26.1%）	2（4.3%）	2（4.3%）	12（26.1%）	1（2.2%）	17（37.0%）

（注）〈　〉は残差を示している。

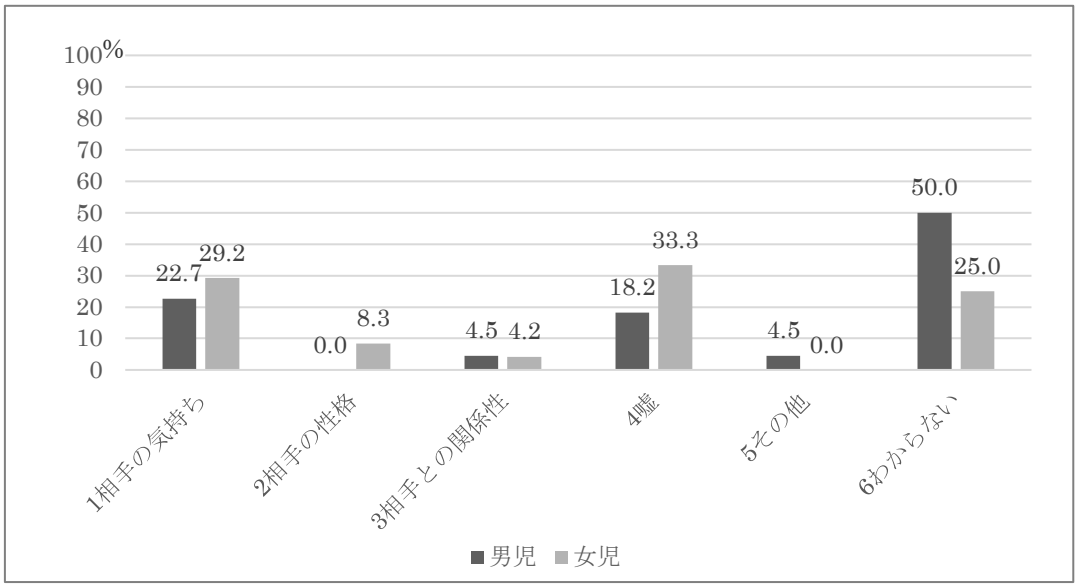

Figure 8　善悪判断の理由づけにおける性別別の各カテゴリーの割合

（3）自己仮想課題②

white lieの使用：返答質問おける性別別の正答者の割合をFigure 9に示す。参加児全体で正答と誤答に偏りがあるか調べるために二項検定を行った結果、正答者の割合（78.3%）の方が誤答者の割合（21.7%）よりも有意に高く（p<.001）、正答者の割合は自己仮想課題①（65.2%）よりも高い結果となった。年齢群間（$\chi^2(1)=0.02$, n.s.）や性別群間（$\chi^2(1)=2.59$, n.s.）で有意な偏りは見られなかったが、女児（87.5%）の方が男児（68.2%）よりも正答者の割合は高かった。

white lie使用の理由づけ：自己仮想課題②におけるwhite lie使用の理由づけも自己仮想課題①と同様にTable 1をもとにカテゴリー分けした。理由づけ質問における各カテゴリーの人数（割合）をTable 7に示す。

χ^2検定を行った結果、カテゴリーの分布に有意な偏りが見られた（$\chi^2(4)=23.00$, p<.001）。残差分析の結果、“相手の気持ち”に言及する参加児の割合（66.7%）が有意に高かった（p<.01）。また、性別とカテゴリーの関連を調べるために性別（2）×カテゴリー（5）のχ^2検定を行った結果、

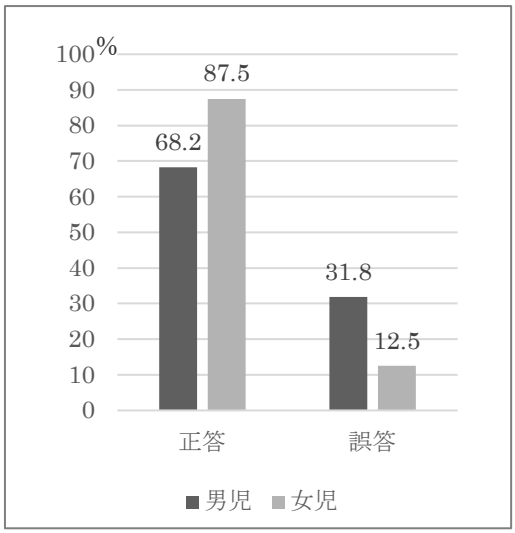

Figure 9　自己仮想課題②の返答質問における性別別の正答者の割合

有意な偏りが見られた（$\chi^2(3)=9.43$, $p<.05$）。残差分析の結果、女児において“相手の気持ち”（81.0%）が有意に多く（$p<.05$）、“わからない”（0%）が有意に少なかった（$p<.05$）。男児においては“わからない”（26.7%）が有意に多く（$p<.05$）、“相手の気持ち”（46.7%）が有意に少なかった（$p<.05$）。自己仮想課題②の理由づけ質問における性別別の各カテゴリーの割合をFigure10に示す。

Table 7　自己仮想課題②の理由づけ質問における各カテゴリーの人数（割合）

	1相手の気持ち	2相手の好意	3相手との関係性	4その他	5わからない
男児	7（46.7%）〈−2.2*〉	1（6.7%）〈−0.7〉	0（0%）〈0〉	3（20.0%）〈1.4〉	4（26.7%）〈2.5*〉
女児	17（81.0%）〈2.2*〉	3（14.3%）〈0.7〉	0（0%）〈0〉	1（4.8%）〈−1.4〉	0（0%）〈−2.5*〉
全体	24（66.7%）	4（11.1%）	0（0%）	4（11.1%）	4（11.1%）

（注）〈　〉は残差を示している。*：$p<.05$, **：$p<.01$

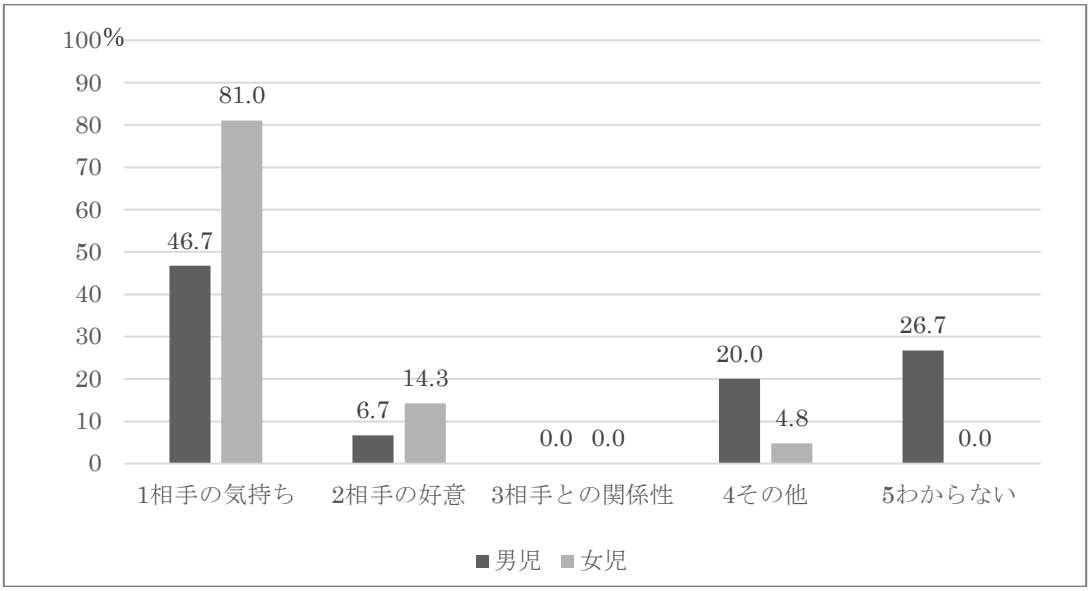

Figure 10　自己仮想課題②の理由づけ質問における性別別の各カテゴリーの割合

他者感情理解：自分の返答による相手の気持ちが理解されているかを問う信念質問において、返答者がwhite lieを使用した場合は「うれしい気持ち」など相手がポジティブな感情になることを回答した場合を正答とし、返答者が真実を口にした場合は「悲しい気持ち」など相手がネガティブな感情になることを回答した場合を正答とした。自己仮想課題②では１人を除く参加児全員が正答した。

white lie得点：自己仮想課題①と同様にして、Table 8のように自己仮想課題②における返答質問と理由づけ質問の回答を合わせて得点化した。虚偽の返答をせず「気に入らなかった」などと真実を口にした場合を０点、「気に入ったよ」などと虚偽の返答をしたがその理由づけはできなかった場合を１点、虚偽の返答をし、「お友だちが悲しんじゃうから」などと正当な理由づけができた場合を２点とした。理由づけは、先に示したカテゴリーの１（相手の気持ち）、２（相手の好意）、３（相手との関係性）に当てはまるものを正答とした。自己仮想課題②における性別別の各得点の割合をFigure 11に示す。

white lie得点の男児の平均値（SD）は1.05（0.84）、女児の平均値（SD）は1.70（0.69）であった。年齢群や性別群とwhite lie得点に関連があるかを検討した結果、性別によるwhite lie得点の偏りが見られた（$\chi^2(1)=8.58$, $p<.01$）。

Table 8　自己仮想課題②における各得点の人数（割合）

	虚偽	理由づけ	全体
0点	×	×	10（21.7%）
1点	○	×	8（17.4%）
2点	○	○	28（60.9%）

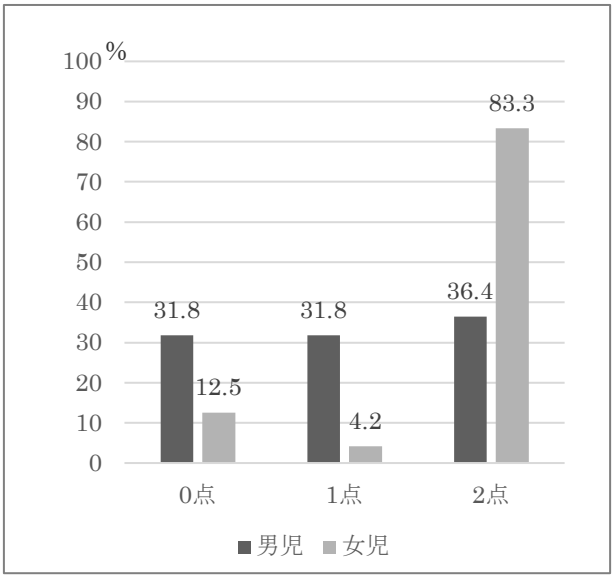

Figure 11　自己仮想課題②における性別別の各得点の割合

3-3　課題間の比較

（1）誤信念理解とwhite lieの使用の関連

誤信念理解とwhite lieの使用率をFigure12に示す。誤信念理解とwhite lieの使用の関連を調べるために、誤信念理解正誤（2）×white lie正誤（2）のχ^2検定を行った結果、自己仮想課題①

（$\chi^2(1)=0.02$, *n.s.*）、自己仮想課題②（$\chi^2(1)=0.04$, *n.s.*）ともに有意な偏りは見られなかった。

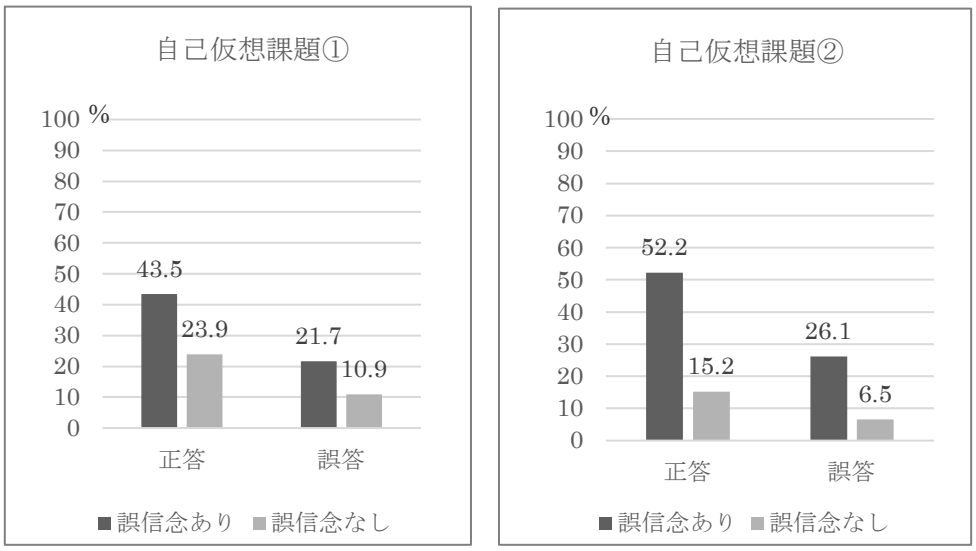

Figure 12　誤信念理解とwhite lieの使用率

（2）善悪判断とwhite lie使用の関連

善悪判断とwhite lieの使用に関連があるか検討するために、善悪判断（2）×white lie正誤（2）のχ^2検定を行った結果、自己仮想課題②において有意な偏りがあり（$\chi^2(1)=2.98$, $p<.10$）、善悪判断で“いいこと”と判断する参加児の方が自己仮想課題②でwhite lieを使用する傾向が見られた。善悪判断と自己仮想課題②におけるwhite lieの使用率をFigure13に示す。

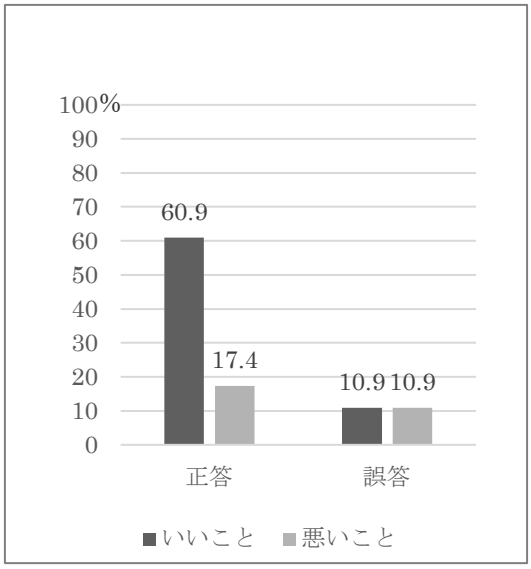

Figure 13　善悪判断と自己仮想課題②におけるwhite lieの使用率

（3）white lieの使用パターン

自己仮想課題①と自己仮想課題②においてwhite lieの使用に変化があるか調べるために、Table 9のようにwhite lieの使用パターンを３つに分類した。返答質問においてwhite lieを使用した場合を○とし、white lieを使用しなかった場合を×とした。性別別の各使用パターンの割合をFigure 14に示す。

年齢群間や（$\chi^2(2)=0.58$, *n.s.*）、性別群間（$\chi^2(2)=2.72$, *n.s.*）において有意な偏りは見られなかった。全体では自己仮想課題①と自己仮想課題②で一貫しているパターン（○○、××）の割合が高いたが、６人が課題間で返答に変化があり（×○）、自己仮想課題①ではwhite lieを使用しなかったが自己仮想課題②ではwhite lieを使用した。

Table 9　各使用パターンの人数（割合）

	自己仮想課題①	自己仮想課題②	全体
1	○	○	30（65.2%）
2	×	○	6（13.0%）
3	×	×	10（21.7%）

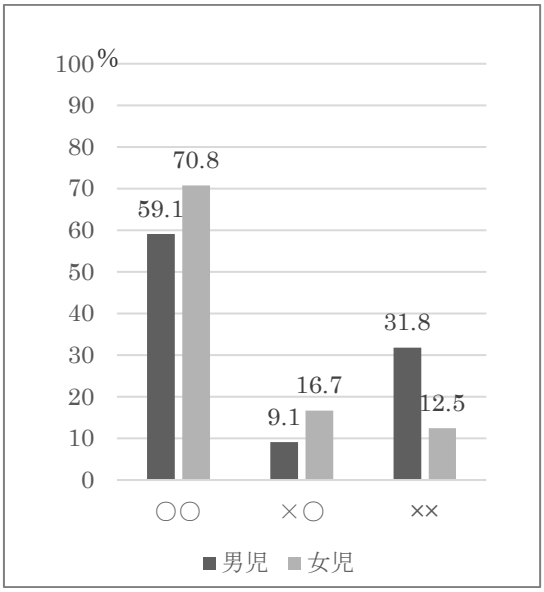

Figure 14　性別別の各使用パターンの割合

（4）white lieの使用パターンと他者仮想課題との関連

課題間でwhite lieの使用に変化があった６人のうち、他者仮想課題で理由づけができ、かつ善悪判断で“いいこと”と判断した参加児は４人であった。それに対して、自己仮想課題①自己仮想課題②どちらにおいてもwhite lieを使用しなかった10人の参加児のうち、他者仮想課題で理由づけができ、かつ善悪判断で“いいこと”と判断した参加児は１人のみであった。white lieの使用パターンと他者仮想課題との関連を示した表がTable 10である。

Table 10　white lieの使用パターンと他者仮想課題との関連

他者仮想課題		white lieの使用パターン	
white lieの理由づけ	善悪判断	×○	××
○	いいこと	4人	1人
×	いいこと	1人	4人
○	悪いこと	0人	5人
×	悪いこと	1人	0人

4．考察

本研究では、幼児期におけるwhite lieの使用とその動機づけについて、仮想場面を用いて検討を行った。以下結果を概観した上で、対人葛藤場面における子どもの向社会的行動を促進するための効果的な方法について考察を行う。

4-1　幼児期におけるwhite lieの使用率（仮説Ⅰの検証）

自己仮想課題①におけるwhite lieの使用率は65.2%であり、Talwar, et al.（2007）の実験場面を用いた調査と整合する結果となった。また、年齢群による有意な差はなかったことから、年中児の時点ですでに半数以上がwhite lieを使用するようになり、就学後に安定して使用できるようになると予測される。また、white lieの善悪判断において、参加児の71.7%が“いいこと”であると判断し、“いいこと”と答えた参加児は“悪いこと”と答えた参加児よりも自己仮想課題②においてwhite lie の使用率が有意に高かったことから、white lieをポジティブに評価できるようになることで、white lie行動が起こりやすくなることが明らかになった。以上から、仮説Ⅰ（幼児期はwhite lieをポジティブに評価するようになり、white lie行動が可能となる。）は支持された。また、自己仮想課題②におけるwhite lieの使用率は78.3%であり、課題間で変化があったことから、white lieの理解を促進することでその使用率が上昇することが示された。促進材料となった他者仮想課題の効果については後程考察する。

自己仮想課題の返答質問（例：「気に入った？」と聞かれたら何と答える？）において、「ありがとう」や「うれしい」など、直接的な評価を避ける回答がいくつかあった。子どもたちは人から物をもらった際「ありがとう」とお礼を言うことをしつけられ、そのような慣習に基づく反応であったとも考えられる。この場合、相手の信念を意図的に操作するという嘘の定義（Astington, 1995）を必ずしも満たしているとはいえない。さらに、「うれしい」という回答も、「相手が自分のために物をくれたことはうれしい」という意味あいのものであるとも考えられる。この場合、「うれしい」という発話が嘘とはならないため、虚偽の内容を伝達するという嘘の定義（Astington, 1995）を満たしていないことになる。しかし、返答質問に対して「ありがとう」や「うれしい」などの回答があったのは、相手を傷つけたくないが、嘘はつきたくないという二つの道徳的判断の間に葛藤が生じているためであり、「嘘とは言えない」曖昧な表現を使うことで、発言に対する抵抗感や罪悪感を解消していると推測できる。white lieを使用した参加児も、回答するまでにある程度の間があったことから、想定場面において葛藤が生じていることが窺えた。

4-2　誤信念理解との関連（仮説Ⅱの検証）

誤信念理解とwhite lieの使用に有意な偏りがなかったことから、誤信念理解とwhite lieの使用には関連があるとは言えないことが示された。誤信念課題に通過しなかった15人のうち、10人がwhite lieを使用したことから、white lie行動は誤信念理解に先行して可能となることが示唆された。これは、「誤信念理解は嘘行動に必要不可欠な認知的基盤であるとは言えない。むしろ、他者のこころの状態を考えるという点で共通する嘘が、誤信念理解を促進する可能性がある」（藤戸・矢藤, 2015）という先行研究の知見を支持するものである。しかし、誤信念課題に通過した31人

のうち、11人がwhite lieを使用しなかった。つまり、誤信念理解があるからといってwhite lieを必ず使用するわけではなく、誤信念理解とwhite lie行動の発達は相互に促し合っていると考えられる。以上から、仮説Ⅱ（white lie行動は誤信念理解に先行して生起する）は一部支持された。

4-3　white lieの動機づけ（仮説Ⅲの検証）

自己仮想課題①でwhite lieを使用した参加児のうち、53.3%が“相手の気持ち”に言及した理由づけを行った。“相手の好意”や“相手との関係性”を含めると66.7%が正当な理由づけをすることができた。このことから、幼児であっても相手のポジティブな感情を促す、あるいはネガティブな感情を抑制することを意図した他者志向的な動機づけを行うことが示された。特に女児は60.7%が“相手の気持ち”に言及した理由づけをし、“相手の好意”を合わせると82.4%が正当な理由づけをすることができたことから、女児は男児よりもwhite lieの理解の発達が早く、意図的に使用できる可能性がある。以上から、仮説Ⅲ（幼児期におけるwhite lieの動機づけは自己防衛的なものである）は支持されなかった。7、9、11歳児を対象としたXu, et al.（2010）では対人場面の相手を“先生”として実験場面を用いた課題を実施している。そのため、権威者である先生からのネガティブな評価を受ける可能性があり、自己防衛的な動機を答える子どもが多かったと推測される。一方、本研究では対人場面の相手を“友だち”として仮想場面を用いた課題を実施したため、相手からの評価ではなく、相手の気持ちに言及する子どもが多かったと考えられる。

また、自己仮想課題②でwhite lieを使用した参加児のうち、66.7%が“相手の気持ち”に言及した理由づけを行った。“相手の好意”や“相手との関係性”を含めると77.8%が正当な理由づけをすることができた。このことから、自己仮想課題①と他者仮想課題によってwhite lieの使用率が増えただけでなく、white lieの意義の理解が促進されたと考えられる。

さらに、他者仮想課題でも半数以上の54.3%が“相手の気持ち”に言及した理由づけをし、“相手の好意”や“相手との関係性”を含めると63.0%が正当な理由づけをすることができた。つまり、white lieを使用しなかった参加児を含め、全体の半数以上がwhite lieの意義について理解しているといえる。自己仮想課題①でwhite lieを使用しなかった参加児16人のうち、10人は他者仮想課題で正当な理由づけをすることができたことから、white lieを使用しなくてもwhite lieの機能については理解していることが示唆された。逆に言えば、white lieの機能について理解できているからといって、必ずしもwhite lieを使用するわけでない。つまり、white lieを使用できるようになるにはwhite lieの意義の理解以外に必要となる要素があると考えられる。

4-4　嘘の同定

他者仮想課題における嘘同定質問の意義は、「本当の気持ちではない」ことを参加児が理解できているか確かめ、理解できていない場合には正しい知識を与えることであった。つまり、主人公が嘘をついたということを理解した上で後の善悪判断を行ってもらうためにこのような質問項目を設けた。また、本研究では、嘘同定質問を含めすべての質問項目において“嘘”という言葉を使用しなかった。それは、“嘘”という言葉に対して過剰に意識が向いてしまい、行為に対する評価や判断に大きく影響してしまうと考えたからである。嘘同定質問における正答者の割合は年長児が年中児よりも有意に高かった。幼児にとって「事実通りの真実よりも、事実と異なる嘘のほうが概念としては明確であり、“本当であるかどうか”よりも、“嘘ではないかどうか”という基準が用いられている可能性がある」（上宮，仲，2009）という先行研究の知見から、「本当の気持ちか、本

当の気持ちではないか」という質問はやや難しく、年中児で正答率が下がったと推測される。

4-5　white lieの善悪判断

参加児全体の約７割がwhite lieをポジティブに評価した。ネガティブに評価した参加児のうち、１人を除く全員が善悪判断の理由について“嘘への言及”を行ったことから、相手の感情や好意以上に嘘の発言をしたということに着目した場合､white lieをネガティブに評価すると考えられる。一方、ポジティブに評価した参加児のうち、善悪判断の理由について“わからない”と答えた参加児が約半数であったことから、暗黙的に“いいこと”であると判断する場合が多いと考えられる。また、女児のほうが男児よりもwhite lieをネガティブに評価する割合がやや高かった。Lewis, Stanger, & Sullivan（1989）は、約束を破った際の否認行為に性差が見られることを報告し、女児の方が違反行為を恥じらうとともに、社会的是認に対する関心が高いと説明している。本研究においても、女児の方が男児よりも“嘘”の発言に対して否定的な感情を強く抱いたと推測される。

しかし、女児のほうがwhite lieの使用率は高かった。このことから、white lieの使用には善悪判断だけでなく認知的能力も関連していると考えられる。例えば、Talwar & Lee（2008）は葛藤抑制能力が嘘行動と関連することを示している。嘘をつくためには、自分が知っている情報や自分の感情を抑制しなければならない。また、Evans, Xu, & Lee（2011）は反事実的推論能力が幼児の嘘行動に関連している可能性について言及している。反事実的推論能力とは、「現実の因果関係に基づいて、それとは異なる仮定の因果関係を推論すること」であり、嘘行動を成功させるためには、今ここにある現実とは違う原因事象を仮定し、それについて結果を正しく推論する能力が必要となる（藤戸･矢藤, 2015)。これらのことから、女児が男児よりもwhite lieの使用率が高かった要因の一つに、葛藤抑制能力や反事実的推論能力などの認知的能力の性差があると考えられる。

4-6　white lieの発達における介入の効果（仮説Ⅳの検証）

自己仮想課題①でwhite lieを使用しなかった参加児のうち、６人が自己仮想課題②でwhite lieを使用した。つまり、自己仮想課題①と他者仮想課題によってwhite lieの使用が促進された可能性がある。また、課題間で返答に変化があった６人のうち、４人が他者仮想課題の理由づけ質問で正しく理由づけができ、かつ善悪判断で“いいこと”と判断した。一方、自己仮想課題①自己仮想課題②どちらにおいてもwhite lieを使用しなかった10人の参加児のうち、他者仮想課題で理由づけができ、かつ善悪判断で“いいこと”と判断した参加児は１人のみであった。つまり、white lieの意義を理解でき、かつwhite lieをポジティブに評価した場合にwhite lieの使用が促進されることが示唆された。変化しなかった参加児は、white lieの理解が乏しい、あるいは「嘘をついてはいけない」という信念が強いため、使用には至らなかったと考えられる。

促進された要因としては、①自らの行為による相手の気持ちについて思考を促したこと、②主人公の行為についてその意義を一方的に教示するのではなく、参加児自身に考えさせたことが挙げられる。また、white lie使用の動機について正しく説明することができた参加児の割合が自己仮想課題①から自己仮想課題②にかけて増えたことから、上記の二つの作用によって、相手の感情に配慮した意図的な white lieを使用できるようになると考えられる。特に、相手の感情について考えさせることが向社会性を促し、相手のネガティブな感情を抑制してポジティブな感情を引き出すwhite lie行動を促進したと考えられる。以上から、仮説Ⅳ（white lieの意義の理解を促すことで、white lie行動が促進される）は一部支持された。７～11歳を対象に、期待はずれのプレ

ゼントをもらう状況において「真実を述べること」と「嘘をつくこと」について道徳的判断をさせたHeyman, Sweet, & Lee（2009）では、その発言が嘘か本当かという点よりも、相手に与える影響に注目するほど、その場面で「嘘をつくこと」をよりポジティブに、「真実を述べること」をよりネガティブに評価した。このことからも、相手の感情や行為による影響について言及するような教示が子どもの向社会的行動を促進すると予測される。このような経験を積むことで、感情推測能力や反事実的推論能力が培われていき、相手の視点に立った判断に基づいて自らの行為を調整することができるようになると考えられる。しかし、幼児期は「相手の気持ち」以上に「嘘か否か」に左右され、white lieをネガティブに評価することがあるため、道徳的柔軟性が発達途上にあるといえる。white lieを使用できるようになるためには、行為の主体あるいは客体として実際に対人葛藤場面を経験し、言語的な表示規則の理解を深めることが重要であると考える。そこで、本研究の結果および先行研究の知見を踏まえて、Figure 15のようなwhite lieの発達モデルを作成した。

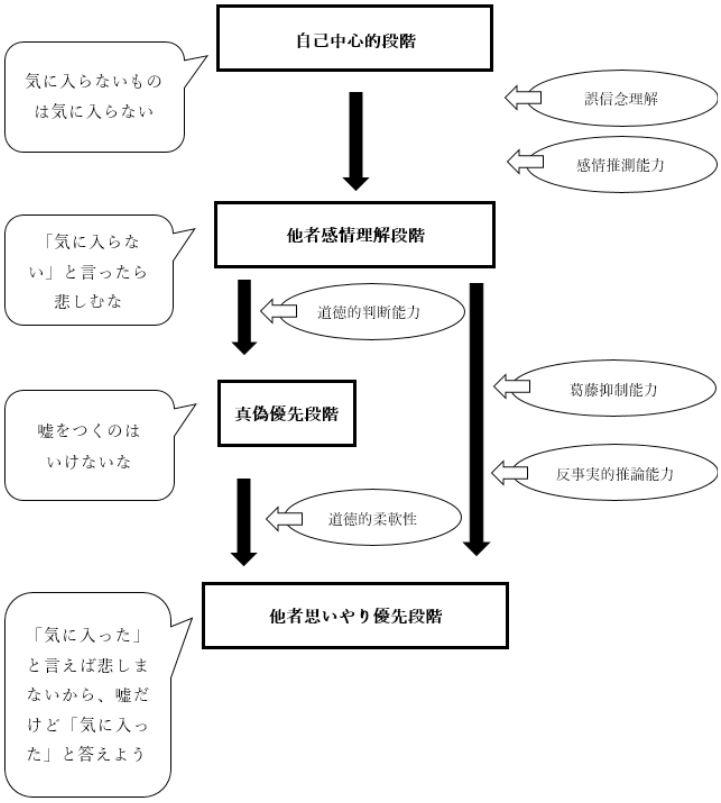

Figure 15　幼児期におけるwhite lieの発達モデル

子どもの道徳性や向社会性を育むために保育や教育の場面では、養育者が子どもの行為に対して善悪判断を下したりその場面での対処法について教示したりするだけではなく、子ども同士の感情の伝えあいを行うことや、子ども自身に行為について振り返らせ、相手への影響を考えさせることが効果的であると考える。このような経験を積み重ねることで、本研究で扱ったような複雑な対人場面においても、向社会性を働かせることができるようになるだろう。

4-7　今後の展望

本研究では、仮想場面を用いて幼児期におけるwhite lieの使用やその動機づけについて検討してきた。仮想場面における対話者は“友だち”に限っていたが、親や先生、年下の子など、相手

によってwhite lieの使用に変化があるのかについては検討の余地がある。また、本研究で用いた課題はあくまで仮想場面であり、実際の対人場面で同じ結果が得られるとは限らない。そこで、実験場面を用いたwhite lie研究を日本人の子どもを対象として行う必要がある。本研究では仮想場面を用いた上に、動機づけなどの自由回答を求める課題が多かったため、年少児は内容の理解に困難があるだろうと考え、調査対象外とした。しかし、本研究における多くの課題で年中児と年長児の間に差が見られなったため、年少児も含めた発達的変化を検討する必要がある。その点においても、思考能力や記憶力を問わない実験場面を用いた課題設定が有効であろう。

また、先述したように、葛藤抑制機能や反事実的推論能力などの認知的能力とwhite lieとの関連について検討する必要がある。例えば、葛藤抑制能力を測る課題として藤戸・矢藤（2015）は赤／青課題を採用しているが、このような実験に加えて、子どもの日常的な行動について養育者にアンケート調査を行うことや保育場面を実際に観察することで、より総合的にwhite lieの生起に必要な要素を検討することができると考える。また、子どもの行動だけでなく、養育者の態度との関連性を明らかにすることで、white lieを含めた向社会的行動を促進する要因を検討することができるだろう。

さらに本研究では、「お友だちが一生懸命作ってくれました」や「ぜったいに喜んでくれるだろうと思っています」などの補助説明を加え、参加児が相手の好意や期待を意識できるようにした。このような低コストの場面に対して、「本当は魅力的なプレゼントをもらえるはずだったが、期待はずれのプレゼントを渡されてしまった」といった高コストの場面で実験を行っている研究もある。そこで、幼児期においてこのようなコストの高低によってwhite lieの使用に変化があるのかを明らかにすることも今後の課題である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、多くの方にご協力をいただきました。この場をお借りして感謝の辞を示します。実験実施やデータの分析に協力してくださった清水ゼミの学生と院生の皆様に心より感謝申し上げます。また、調査に快くご協力くださりました幼稚園教諭の皆様と園児の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考・引用文献

Aknin, L. B., Hamlin, J. K., & Dunn, E. W. (2012). Giving leads to happiness in young children. *PLoS ONE*, 7, e39211.

Astington, J. W. (1995). 子供はどのように心を発見するか:心の理論の発達心理学(松村暢隆, 訳). 東京:新曜社. (Astington, J. W. (1993). *The child's discovery of the mind*. Cambridge, MA: Harvard University Press.)

Brownell, C. A., Svetlova, M., Anderson, R., Nichols, S. R., & Drummond, J. (2013). Socialization of early prosocial behavior: Parents' talk about emotions is associated with sharing and helping in toddlers. *Infancy*, 18, 91–119.

Evans, A. D., Xu, F., & Lee, K. (2011). When all signs point to you: Lies told in the face of evidence. *Developmental Psychology*, 47, 39–49.

藤戸　麻美・矢藤　優子 (2015). 幼児におけるうそ行動の認知的基盤の検討. 発達心理学研究, 26, 135–143.

Gnepp, J., Hess, D. L. R. (1986). Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, 22, 103–108.

Hamlin, J. K., Wynn, K., & Bloom, P. (2007). Social evaluation by preverbal infants. *Nature,* 450,

557-559

Heyman, G. D., Sweet, M. A., & Lee, K. (2009). Children's reasoning about lie-telling and truth-telling in politeness contexts. *Social Development*, 18, 728-746.

鹿子木　康弘 (2014). 発達早期における向社会性：その性質と変容. 発達心理学研究, 25, 443-452.

Lewis, M., Stanger, C., & Sullivan, M. W. (1989). Deception in 3-Year-Olds. *Developmental Psychology*, 25, 439-443.

村井　潤一郎 (2000). 青年の日常生活における欺瞞　性格心理学研究, 9, 56-57

村井　潤一郎 (2013). 嘘の心理学　ナカニシヤ出版 p.18,21

Talwar, V., & Lee, K. (2008). Social and cognitive correlates of children's lying behavior. *Child Development*, 79, 866-881

Talwar, V., Murphy, S. M., & Lee, K. (2007). White lie-telling in children for politeness purpose. *International Journal of Behavioral Development*, 31, 1-11.

田村　綾菜 (2012). 儀礼的なうその発達. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 14, 89-93

上宮　愛・仲　真紀子 (2009). 幼児による嘘と真実の概念理解と嘘をつく行為. 発達心理学研究, 20, 393-405.

瓜生　淑子 (2007). 嘘を求められる場面での幼児の反応：誤信念課題との比較から. 発達心理学研究. 18, 13-24.

Vrij, A. (2008). Lying: A selfish act and a social lubricant. *Detecting lies and deceit: Pitfalls and opportunities* (2nd ed.). Chichester, UK: John Wiley & Sons. pp.11-35

Xu, F., Bao, X., Fu, G., Talwar, V., & Lee, K. (2010). Lying and truth-telling in children: From concept to action. *Child Development*, 81, 581-596.

(2019年３月29日提出)
(2019年４月19日受理)

The Developmental Process of White Lies in Young Childhood:

Lie-telling as prosocial behaviors

Ando, Sakino
Wako Municipal Honmachi Elementary School
Shimizu, Yuki
Department of Psychology and Educational Practice, Faculty of Education, Saitama University

Abstract

We sometimes tell prosocial lies in order to stop someone from being upset by the truth. For example, when you receive a disappointing gift from your friend, you may tell him/her, "Thank you, I like this". White lies are observed even among young children. However, it is still unclear how they are motivated to tell white lies. Furthermore, little is known whether educational interventions promote young children to tell white lies in interpersonal settings. This study investigated what factors affect 4- to 6-year-old children's prosocial lie-telling and whether educational interventions are effective to promote children's white lie. Results suggest that around 70% of young children told white lies and evaluated telling white lies positively. The relationship between the development of theory of mind and that of white lie-telling was not significant. When asked the reason to tell a white lie, young children answered other-oriented motivations rather than self-oriented motivations. In addition, children were promoted to tell a white lie after instructed to think about others' reactions and feelings when they told a truth (i.e. "I do not like this"). These results indicate that young children's ability to tell white lies is higher than estimated in previous studies, and educational interventions are effective to promote their prosocial lie-telling. Findings contribute to understanding the trajectory of young children's prosocial development and have educational implications.

Key Words: Lie-telling, Molarity, Prosocial behavior, Theory of Mind, Interpersonal conflict